

第13章 取材力・構想力・展開力を育てるリライト作文

第12章の実践事例は、テーマと関連する話題を探させたり、先入主と異なる考え方と出会わせたりすることによって、問題意識を高め、「想」の形成と拡充を図ろうとするものであった。これに対して、「表現様式」の分析に重点を置き、範文のレトリックを応用することによって「想」の形成を促す方法も考えられる。範文の「枠組み」を借り、それにふさわしい内容を探し出すことによって、取材力・構想力・展開力を育てていくのである。

第1節 範文の応用による発想・構想の指導—「柿の種」の場合

ここでは、寺田寅彦のエッセイ「柿の種」に用いられたレトリックを利用して、400字程度の小意見文を書かせた事例*1を取り上げる。

1 寺田寅彦「柿の種」の教材としての特質

寺田寅彦「短章」二編は、随筆集「柿の種」（『寺田寅彦全集第十一巻』岩波書店、1961）に収められている。《短章Ⅰ》（俳句雑誌『渋柿』1923年7月号初出）は、「東京という所も存外不便な所だ」と嘆いた180字程度の短い文章である。《短章Ⅱ》（同誌1929年7月号初出）は、「我が家の存在の必然性に関して疑問の念を持つことがある」と述懐した450字程度の文章である。この二章は関東大震災の前後に発表されたものであり、直接的な関連性を持っているわけではない。だが、高等学校教科書『現代文』（明治書院、1984年度版、本論文巻末注記12）では、まるで連続して書かれた随筆であるかのように並置されている。それによって、《短章Ⅰ》および《短章Ⅱ》が、物質文明の危うさや人間存在の不確かさに対して警告を発したものとしてみ取れるように仕組まれているのである。

その教科書編集上の意図はさておき、自然科学者としての冷静な観察力・分析力と、俳人としての鋭い直感力・詩情とが融合した寅彦の発想法*2を利用して、生徒たちにも日常生活を振り返らせ、日ごろ何気なく見過ごしているものに新たな認識を持たせたい。

まず、《短章Ⅰ》を分析しよう。（傍線引用者）

無地のうぐいす茶色のネクタイを捜して歩いたがなかなか見付からない。
東京という所も存外不便な所である。
このごろ石油ランプを捜し歩いている。
神田や銀座はもちろん、板橋かいわいも捜したが、座敷用のランプは見付からない。
東京という所は存外不便な所である。
東京市民がみんな石油ランプを要求するような時期が、いつかはまた巡って来そうに思われて仕方がない。

この短章には、次のような表現上の特徴が見出される。

- ① 第一キーセンテンスでは、「も」によって「地方と同様に東京も不便だ」という当惑感が示され、第二キーセンテンスでは、「は」によって「東京の不便さ」が強調されている。
- ② 「存外」という副詞を繰り返すことによって、ことの意外性が強調されている。
- ③ 「事例→キーセンテンス→事例→キーセンテンス→予言」という構成によって、主張と根拠が明快に示されている。

④「ネクタイ」（趣味的嗜好品）から「石油ランプ」（生活必需品）へと、実用性の高まる順に事例を挙げることによって、東京の不便さがいっそう強調されている。

2 課題の設定—キーセンテンスを利用して発想を導く

この四つの特徴のうち、今回は、①キーセンテンス、②「存外」という副詞、③構成パターンを活用することにする。つまり、二つのキーセンテンス「〇〇という所も（は）存外△△な所である」の、〇〇及び△△の部分に別の適当な語をあてはめ、日常生活のある断面を批判的にとらえさせるのである。「所」に限定しなくともよい。「もの」でもよい。要するに、自分の身近な事物の意外な一面を発見させ、意識的にものを見る目を養うことにつなげるのである。次のような手引きを用意した。

「柿の種」の短章を利用して、「柿の種もどき」を書いてみよう。

日ごろ何気なく過ごしている私たちの身の回りにも、よく観察してみれば、意外な一面が見出されるのではないだろうか。私の住んでいる町、私の通っている学校、私たちの使っている物……

「〇〇という所も（は）存外△△な所である」をキーセンテンスにして、随筆を書いてみよう。

《構成パターン》

(エピソード①)	<ul style="list-style-type: none"> ・体験したこと。 ・実感したこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇は地名でなくともよい。 ・△△は、便利・不便に限らない。
----------	------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------

「〇〇という所も存外△△な所である。」（キーセンテンス①）

(エピソード②)	<ul style="list-style-type: none"> ・体験したこと。 ・実感したこと。
----------	------------------------------------------------------------------------------

「〇〇という所は存外△△な所である。」（キーセンテンス②）

(予言・警告) ～に思われて仕方がない。	・体験を基に、まだ気づいていない人に警告する。
----------------------	-------------------------

《発想メモ》三つ候補をあげてみて、一番魅力的なものを選ぶ。

	〇〇	存外△△	エピソード①	エピソード②
1				
2				
3				

3 生徒作品例

提出された作品の中には、常識的な事例しか挙げられないものや、ひとつの事例しか挙げられないものもあったが、ほとんどの生徒が「存外不便なもの」をキーワードとして、日常生活の中から適切な事例を見つけ出してきていた。コンビニエンス・ストアのもつ意外な不便さ、車社会の不合理性、電話など通信機器の犯罪性など、これまでは何気なく見逃してきたことを、別の側面から見つめてみようとする姿勢が生まれたのである。

生徒たちが取り上げた話題は、次のようなものである。

A 交通（ローカル線、車、自転車）／B 地域社会（学校所在地、デパート）／C 小物や家具（冷蔵庫、消しゴム）／D コミュニケーション（電話、言葉）／E 社会現象（ビデオ、薬、消費税、占い）／F 自然と文明（機械文明、地球）／G 高校生活（古典の授業、

部活動、クラス) / H 生き方 (女性) / I 家族 (母、ペット)

この中から、二編を取り上げる。まず、寺田寅彦のレトリックを応用し、地球温暖化現象をやや誇張して取り上げた作品である。日常の晴雨の予報から異常気象へと事の意外さのレベルを上げ、結びで地球温暖化に対する警告へとつなげている。

きのう天気予報で、今日は晴れると言っていた。しかし、今日は、雨だった。

天気予報というものも存外あてにならないものである。

最近、異常気象で、人々が予測していなかった天気になることが多い。

天気予報というものは存外あてにならないものである。

人々が、冬になっても、冷房器具を買い求めている光景を、町のあちこちで見られる日が、近々やって来るように思われて仕方がない。

さらにキーワードを転じると意外な作品が出てくる。次の作品例は、社会的な広がりには欠けるが、高校生の日常生活をさらりとすくい上げ、ユーモラスな展開となっている。

朝、目が覚めると、たいてい十時を過ぎている。朝とも昼ともいえない、どっちつかずの食事をして、くつろぎにもならぬ不規則な時間をついつい過ごしてしまう。

休日というものも存外不要なものである。

一息ついたところで、勉強をしなければいけないと思ってもなかなかできない。平日だったら、嫌でも授業を受けなければならないから、できるのに。

休日というものは存外不要なものである。

休日をもっと有意義に過ごすべきだったという、後悔の気持ちが必ずおとずれるだろう。

4 本実践の成果

この実践で養われるのは、次の四つの力である。

第一に、「問題発見力」である。日常のさりげない出来事に真実を発見したり、常識とされていることの中に新しい意味を発見したりする力である。こうした課題に取り組みさせることができかけとなって、日頃から問題意識を持って生きるように促すことができる。

第二に、「柔軟な発想力」である。常識に寄りかかった発想では、何も見えてこない。「○○という所は存外△△な所だ」というキーセンテンスの「○○」と「△△」とをどう結びつけるか。「存外」にふさわしい組み合わせを見つけることが必要となる。

第三に、「豊かな語彙力」である。短い文章を書こうとすれば、的確な語彙を用いる必要性がますます高まってくる。この課題は、複数の事例に共通する性質をいかなる抽象語にまとめればよいのかを考える学習ともなる。

第四に、「論理的な思考力」である。この課題は、事例と主張との関係を確認、筋道立てて考える力を育てていくものである。「型」(文章様式)が求めているものを見抜き、それを使いこなす練習を反復することによって、論理的思考力が高まるのである。

第2節 範文の応用による新題材の発見—「目玉焼の正しい食べ方」の場合

範文を利用して「想」の形成を図る方法は、長文を書かせる際にいっそう効果を発揮する。

本節では、伊丹十三のエッセイを用いた実践事例*3について考察する。

1 伊丹十三「目玉焼の正しい食べ方」の特質

伊丹十三「目玉焼の正しい食べ方」（伊丹十三『女たちよ！』文春文庫、1975。本論文巻末注記13）は、森岡健二編著『文章構成法』（東海大学出版会、1989）に「名文例」として収められた文章である。「目玉焼をいかに食べるか」という些細な問題について、大まじめに論じ立て、数々の方法を紹介しながら、結局は、「この文章と同じようなことを、喋りながら実演すればよいのだ」と煙に巻いてしまう。ユーモラスで巧みな論の進め方である。

この文章の教材としての魅力は、七点挙げることができる。

第一は、着眼点の鋭さと新鮮さである。「目玉焼の食べ方」という意外な話題を取り上げて関心を持たせるとともに、ことさらにマニュアル化してみせたことによって、ユーモラスな味わいを生み出すことに成功している。

第二は、文章構成の確かさである。書き出しで簡潔に主題を提示し、三つの「正式でなさそうな食べ方」とその理由を列挙した後、再度主題を提示する双括法が用いられている。

第三に、事例の描写の豊かさが挙げられる。三つの事例には、いずれも実感のこもった描写がなされており、人間の心理について漸層法的な洞察が加えられている。

第四に、語彙の豊かさがある。各種の事例を否定する表現も、「どう考えても正式でなさそう」「一見して邪道とわかる」「人前で許さるべきものではありません」「やはり完全な方法ではありませんまい」など、多彩である。

第五に、文末表現の多様さがある。この文章は6段落25センテンスで成り立っているが、「である」「てしまう」がそれぞれ4例ずつ用いられている以外は、すべて異なった文末表現となっている。この文末表現の豊かさは、常体の一部に敬体が混入しているという難点を補って余りある。

第六として、センテンスの長短の変化を挙げることができる。全体としては平均38.4字という標準的な長さであるが、最も長い文は100字を超え、最も短い文はわずか10字となっている。書き出しの部分、結びの部分は、短いセンテンスを用い、展開部の後半に長いセンテンスを用いて、文章のリズムに変化を持たせている。

第七に、無駄な接続語句がないことである。逆接の接続詞を補ってもよいところでも、前後関係から明らかなどころには用いていない。接続語句は、約1000字の文章中に、「それに」「そして」「となると」「かつ」「つまり」「すなわち」の6語句しか見られないのである。しかも、段落の最初に用いられているのは「となると」だけである。この接続語句の少なさが、理屈っぽさを感じさせない文体を生みだしていると言える。

2 教材化の工夫と指導上の留意点

さて、この軽妙洒脱な文章を教材化するには、どの特徴を生かせばよいのであろうか。また、どういう課題を与えれば、この範文の魅力を手得させることができるのであろうか。

まず「主題」に関しては、この範文の着眼のよさを学ばせたい。そのために、主題提示文「～というものはどうも…しにくいものである」という表現を活用することとする。

次に「構想（材料と配列）」では、「材料（事例）」を三つ並べることで説得力が増すことを実感させたい。「配列（構成）」は、範文の型をそのまま利用するが、事例の並べ方については学習者の創意工夫が生かせるようにする。範文の表現に学べば、「実は用いたい方法」を最初に提示して一旦否定しておき、第二例以下で「それ以上に問題が多いもの」を取り上げる

ことになる。あるいは、最初に「最も一般的な事例」を挙げ、最後に「奥の手ともいうべき事例」を取り上げることにしてもよい。いずれにしても事例の軽重を考えることによって、構成力が鍛えられることになる。

第三に「叙述」については、文末表現や修辞上の工夫などに気付かせたい。だが、これらについては解説が多すぎるとかえって書きづらくなる。解説よりも実作に重点を置き、範文の言い回しを利用させることによって、自然と体得してくれることに期待したい。

以上のように考えて、本教材においては、次のように「枠組み表現」を指定する。

【指定した「枠組み表現」】
I (A) というのはどうも (B) しにくいものである。〔主題提示〕
II a どう考えても正式でなさそうな仕方に (C) がある。〔誤った事例の提示1〕
b (だが、) これは、……だ。〔Cが誤っている理由を示す〕
III a (D) という考えをおこした人があった。〔誤った事例の提示2〕
b (しかし) これも一見して邪道とわかる。〔以下、Dが誤っている理由を示す〕
IV a となると、残る方法はただ一つ。(E) というやり方である。〔誤った事例の提示3〕
b (しかしこれも、) 完全な方法ではあるまい。〔以下、Eが誤っている理由を示す〕
c つまり、(A) というものは、それほどまでに (B) しにくいものなのである。〔主題再確認〕
V 私の用いている方法を述べよう。すなわち (F) すればよいのである。〔新たな提案・結び〕

3 文章表現の実際

学習者たちが取り上げた話題は、下記のように多岐にわたった。

A 「ケーキの正しい食べ方」等、食べ物に関するもの。／B 「授業の正しい選び方」等、学生生活に関するもの。／C 「訪問販売の正しい断り方」「バスの快適な乗り方」等、対人関係に関するもの。／D 「残り少ない石鹸の美しい後始末の仕方」等、家庭生活に関するもの。／E 「眠気の正しい吹き飛ばし方」等、生理現象に関するもの。／F 「体重の正しい減らし方」等、身体に関するもの。

いずれも、日常生活に取材し、そこに見られる人間のユーモラスな一面をうまくとらえている。その中から、一編だけ紹介する。

●作品例（人間の心理に着目した作品例）「アルバイトの正しいやめ方」

アルバイトというものは、やり始めるのは簡単だが、どうもやめにくいものである。今までに、気をつかうことなくやめたという人にお目にかかったことがない。

どう考えても正式でなさそうなアルバイトのやめ方に、無断で行かなくなるという方法がある。しかしこれは、さすがに良心が痛む方法である。また、アルバイト先の人を偶然見かけたときのことを考えてみよう。ほら、冷や汗をかきながら、頭をまるめて隠れる自分の姿が目には浮かぶだろう。これでは何だか犯罪者にでもなった気がしてしょうがない。そうすると、この方法は一番楽ではあるが、一番勇気の要る方法といえるかもしれない。

こんな思いはいやだと、手紙を残すという方法を考えた人もいた。しかしこれもどこかおかしい気がする。アルバイトという立場のくせに、辞表を提出する社員のとる方法に似ているからだ。

となると残る方法はただ一つ。アルバイト先の友達に伝えてもらうという方法だ。しかしこれも完全な方法ではあるまい。この方法だと、その月の給与を取りに行きづらく、涙を飲んであきらめ

るようになりかねない。

つまり、アルバイトというのはそれほどまでにやめにくいものなのである。

参考までに私の用いた方法を述べよう。これは、非常に緊張するアルバイトのやめ方である。つまり直接言えばいいのである。「これでやめられる」と思えば、意外と勇気が出るものである。

4 「枠組み作文」の効用

この作文に取り組んだ学習者は、次のような感想を述べる。

「物事を一方だけからみて文章を書くのではなく、色々な方向から考えて書くことに魅力を感じた。」／「かたくならずに気軽に取り組めた。何を書くかだけを考えればよいので、話の内容を考える方に手がまわせてよかった。」／「それぞれの個性的な発想が出ておもしろい教材だと思う。枠組みが指定されたことによってかえって書きやすかった。」／「最初は窮屈そうだったと思ったが、書いてみると、枠組みが決まっているからこそ出せるおもしろさを感じることができた。」

つまり、範文の「枠組み表現」を利用した作文指導には、次のような効用があると認めることができる。

第一に、学習者にとっては、表現意欲が喚起され、しかも作品全体の見通しが持てるので、最後まで楽しく書き進めることができるということ。

第二に、骨格のはっきりした文章の型に依拠するので、学習者は安心して主題探しや事例探しに取り組むことができるということ。

第三に、一つの型を身に付けることによって、漠たる思いに形を与えることができ、その体験を通して、認識の仕方を学び取ることができるということ。

第四に、範文独特の言い回しを一部活用するので、表現語彙においても、各自のそれまでのレベルとは異なった世界に導くことができるということ。

第五に、評価の観点を明確にできるということ。論旨が一貫しているか、着想にオリジナリティがあるか、事例を豊かに集めているか、という観点で評価すれば、時間もかからず処理がしやすくなる。

こういう方法であれば、学習者も指導者もさほど苦にせずに、書く機会を数多く作ることができるのである。

第3節 範文の応用による文章展開力の指導—「正しい風邪の引き方」の場合

マニュアル風エッセイは、既に、高等学校教科書「国語Ⅰ」（角川書店、1994年度版）等にも採録されている。その一つが、別役実「正しい風邪のひき方」（本論文巻末注記14）である。当該教科書には、「この文章に倣ってマニュアル風のエッセイを書いてみよう」という課題が示されているが、生徒たちにとっては、それだけでは何から手をつけたらよいか分からない。範文の特質を分析し、その発想法と文章展開法を体得させる必要がある。

本節では、この別役の発想法と論理展開を応用した実践例*4を取り上げる。

1 別役実「正しい風邪のひき方」と教材化のねらい

「正しい風邪のひき方」は、マニュアル風のタイトルを付け、その方法を手順良く説明しているように見せながら、実は人間の心理を鋭く分析し描写した文章であると言える。しかも、「目玉焼きの正しい食べ方」のように結びで肩すかしを食らわされることがない。一貫して真

面目な態度で論じようとしているところに、いっそう質の高いユーモアの精神が窺える。

まず、タイトルが面白い。風邪は本人の意思に反してひいてしまうものでありながら、まるで自分の意思でコントロールできるものであるかのように見なしているところに、着眼および表現のおもしろさがある。

次に、段落構成が明確でよい。基本的に各段落の冒頭にトピックセンテンスを置き、要旨の捉えやすい構成となっている。

第三に、書き出しも魅力的である。無駄なく、直截に主題に入るキレの良さ。しかもその内容は、誰でも経験のあることでありながら、思いもかけない切り口で「風邪のひき方」としては最悪の方法として断じられるので、その意外性に心惹かれて読み進めたくなる。

さらに、各事例を比較検討するにあたっては、時系列にしたがって論が進められるので、無理なく読み進めることができる。なおかつ、それぞれのケースにおける長所と短所が具体的に説明され、優劣の順が多彩な文末表現によって書き分けられているので、退屈することがない。そして、結論に至っては、これまで取り上げた事例が普遍化され、すっきりとまとめられているので、思わず納得させられてしまうのである。

このような魅力の源は、「〇〇の正しい～の仕方」というタイトルがもたらす着想の新しさと、四通りの対策を具体的に述べて、その是非を判定していく文末表現の多彩さにあると考えられる。その中心となっている文末表現を抜き出すと、次のようになる。

- I ～くらい愚かしいことはない。〔最悪の策の提示〕
- II ～のがいちばんいい。〔最善の策の提示〕
- III ～しないほうがいい。〔回避策の提示〕
- IV ～したほうがいい。〔次善の策の提示〕
- V 原則としては、～なければならない。これがかなり重要な事柄と言えよう。〔結論〕

このタイトルの付け方と、五箇所の文末表現を「枠組み」として指定すれば、次のような効果が得られると期待できる。

内容面では、日常生活における心理の変化に関心を持たせ、自己を相対化して捉えるように導くことができるという利点がある。また、様々なケースを想定して、比較検討しなければならなくなり、その過程で自ずから分析と比較の思考が活性化されるはずである。

表現面では、重点先行型の文章構成を体験させ、文章体の語句や言い回しに親しませることができるという利点がある。無駄な前置きを排除した印象的な書き出しや、全体を締めくくる適切な結びの表現など、学ぶところが多い。さらにまた、執筆途中で文章の流れを見失うことが少なくなり、首尾一貫した文章が書きやすくなる。

2 文章表現の実際

学習者たちが取り上げた話題は、食生活・学生生活・人間関係・時間の過ごし方・言葉など、バラエティに富んだものとなった。——「正しい待ち合わせの仕方」、「正しい涙の流し方」、「回転寿司の正しい食べ方」、「正しいバーゲンセール付き合い方（男性編）」、「正しい仮病の使い方」、「正しいウソのつき方」、「正しい告白の仕方」、「正しい（笑）の使い方」、「正しい小言の受け方」、「正しい遅刻入室の仕方」、「正しい贈り物の選び方」、「修学旅行の正しい眠り方」、「正しい〇〇（自分の名前）の使い方」、「電車の中での正しい目の置き場所」、「正しい手の上げ方」などである。

その中から一編を取り上げる。（傍線引用者。「枠組み」を応用した箇所である。）

■勧誘電話の正しい断り方

勧誘電話がかかってくるたびに、興味のない話を長々と聞かされてしまうくらい、愚かしいことはない。こちらが明らかに面白くなさそうに受け答えしてみせても、相手は一方的にしゃべり続ける。それにちょっとでも油断をしていると、話をうまいように進められてしまいかねないのである。

人一倍お人好しで、正直であったからこそ、そのような話を聞く羽目になってしまったのだが、それを利用されたのではたまったものではない。しかも、周りにいる人間には「そんな話をまじめに聞くのは時間の無駄だ」と言われたり、「早く電話を切ってしまえ」というジェスチャーを飛ばされたりする。このように、お人好しで正直な人間は、勧誘電話と周りの人間との板挟みとなって、一人苦しまなければならないのである。

勧誘電話には、名指しされる人間が出ないようにするのが一番いい。なぜなら、これが最も穏便かつ簡単に事を済ませられる方法だからだ。よく勧誘電話がかかってくる人は、まず、家族等に電話の取り次ぎ役を頼んでおけばいい。ここで、勧誘電話と思われる電話には「不在です」と言ってもらおう。

また、要は、相手に本人ではないと思込ませればよいのだから、演技をしてみるのも一つの手である。特に、声音や口調を使い分け、自分とは違う年齢層を演じると効果的だ。この場合、若者相手には母親のようなしゃべり方で「今、外出していますが、何のご用ですか」と聞いてみよう。すると相手は何も言うことなく電話を切る。逆に、中年の人相手には、できるだけ子供っぽく対応してみる。そうすれば、彼らは途端に口調を和らげ、「わかりました」と簡単にあきらめてくれるのだ。

しかし、演技をするにはちょっと無理があると感じたときには、演技なんかしない方がいい。例えば、家族がうっかり取り次いでしまった時にはもう逃れようがないし、平日の昼間に子供の真似をするのも不自然で、こちらの方がしどろもどろになってしまいかねない。そのような場合には、覚悟を決めて、自分こそが本人であると認めなければならない。その時、重要なのが、相手を調子づかせないことである。まず単刀直入に「用件は何ですか」と聞いてみよう。このように出鼻を挫いてやると、大抵の相手はやる気をなくし、受話器を置いてしまう。それでも、まだ食いさがる相手には、「勧誘には興味なんかありません」ときっぱり言い放ち、こちらから電話を切ってしまえばいい。ただし、この方法は、勧誘を断るという点においては完璧なのだが、少々面白味に欠け、かつ乱暴な印象を周囲に与えるので、注意を必要とする。

しかしもし、演技をする自信も、勧誘をきっぱりと断りきれない自信もないのなら、どんなに無礼な奴だと非難されようとも、すぐに電話を切ってしまった方がいい。ここで電話を切れない人が、最初に述べたような苦しい事態に陥ってしまうのだ。この方法は少し後味が悪いのだが、あまり気に病む必要はない。なぜなら、勧誘電話自体が礼を欠いていることが多いからである。馴れ馴れしい口調で話しかけてくるのはまだ序の口で、中には昔のクラスメートの名をかたってくる者もいる。そんな人間からの電話をガチャンと切っても、それはおあいこというものだ。また、そのようにすることは、「勧誘電話なんか絶対聞かないぞ」という意思表示にもなる。

論理的に考えれば、もしすぐに電話を切ってしまうことが無礼だと非難されるのなら、きちんと話を聞くやり方は尊敬されてしかるべきなのだが、それがそうでないところに勧誘電話を断るということの難しさがある。原則としては、勧誘電話は相手の話術にはまる前に、確実に断らなければならない。そして出来得れば、相手から電話を切ってくれるように仕向けるのが望ましい。これが、勧誘電話を断るにあたって、我々の心得るべき重要な事柄と言えよう。

このように、この教材は、インパクトが強く、関心を持たせ、話題の発見を導くことにきわめて効果的なものである。また、事例を多く探すことによって、多角的なものごとを捉えさせることにも効果がある。

別役実の文章には、「文章語」が多用されているために、語彙の豊かさに戸惑った学習者もいるが、こういう質の高い表現と出会い、書く回数を重ねることによって、発想力・構想力とともに叙述力も高まっていくのである。

第4節 聞き書きによる取材力・文章展開力の育成

第1～3節において取り上げた「枠組み作文」は、停滞しがちな作文教室に新しい風をもたらしてくれる方法ではあるが、度を越すと、形式的な観念論に陥ったり、単なる言葉遊びに流れてしまったりする恐れがないとは言えない。指導の際には、範文の「型」を利用して「想」の形成・拡充を図るとともに、鋭い人間観察や深い人間理解に至らしめることが求められるのである。

その一つの方法として、本節では、「聞き書き」による取材力と文章展開力の育成について考察する。原点に戻って考えるならば、深い人間理解を伴った豊かな自我の形成は、生活体験や読書体験の充実と、話し合いや書くことによる内省によってもたらされるものであると言える。とすれば、作文指導においても、「今ある自己」に話題を求めだけでなく、「他者と関わる機会と場」を設定して取材対象を広げるとともに、学び得たことを人に伝える活動を仕組む必要がある。

「聞き書き」については、高等学校におけるすぐれた実践事例*5が発表されている。また、論者も既に10年間にわたる「聞き書き指導」の実践を重ねてきた。その指導経験と数編の論考*6を踏まえて、ここでは、比較的短時間で実践できる方法*7を提案する。

1 学習指導計画

この単元（4時間扱い）では、次のような学習指導過程をとる。

- ①新聞記事「ひと」の特徴と文章構成について分析する。
- ②インタビュー実施上の留意点（ディテールを聞くことの重要性）を理解する。
- ③ペア・インタビューを行う。（各15分／テーマ「私が夢中になっていること」）
- ④ゲストにインタビューする。（テーマ、「私と仕事」）
- ⑤インタビューによる取材内容をもとに、600字以内の人物紹介記事に仕上げる。
- ⑥紹介記事を読みあい、相互鑑賞と反省会を行う。

この学習指導の工夫点は、四つある。

第一は、到達目標を具体的にイメージすることである。どういう表現形態の文章を書こうとしているのかを最初の段階で明確にしておくことによって、「想」の形成が容易になる。しかも、その文章モデルの構造を分析し理解しておけば、執筆する際の文章展開の方法も自覚できるようになるのである。

第二は、できるだけ未知の人とペアを組ませることである。同級生同士のおしゃべりではなく、少し改まった形でインタビューさせるのである。それによって言葉遣いも丁寧になり、知らない世界を知る喜びも倍加することとなる。また、聞き出した内容は、自分しか知らない情

報であるから、他の人に伝える価値のあるものとして自覚させやすくなる。

第三は、テーマの設定である。社会人の場合は、「仕事」について取材するのが最も効果的であるが、生徒同士の場合は、「私が夢中になっていること」とするとよい。誰もが打ち込んでいるものは持っているから、その魅力を聞き出すのならば、話題に困ることがない。しかもその人物の内面に迫ることができ、相互理解の場としても生かせるのである。

第四は、書き上げた紹介記事を読みあうことである。自分の語ったことが他者の目にどのように映り、どのように整理されるのかを知ることは、自己認識を深めるきっかけとなる。しかも、この場合は、相手の良さを見つけて紹介する記事であるから、自己のあり方に激励を受け、自信を持つきっかけともなるのである。

2 人物紹介記事の分析と教材としての価値

新聞に毎日掲載されている「ひと」欄には、時の人の素顔が紹介されていて興味深い。インタビューによる取材メモを元に、本人の台詞が抽出され、印象的なエピソードが紹介されている。しかも、文章構成は、多くの場合、「現在」→「過去」→「未来」の順となっている。現状を紹介した後、そこへ至る動機や苦心談が紹介され、最後は今後の夢や決意を語るという構成になっているのである。

この構成法を念頭においてインタビューに取り掛かると、論理的に考えることが容易になり、取材もしやすくなる。「現状の把握」→「原因の追究」→「今後の対策」という論の展開と全く同じだからである。

なお、モデルに取り上げるのは、政財界や芸能界の有名人でない方がよい。一時的にときめいた人よりも、右の記事「旅客機のパイロット資格を自力で取得した／小林郁子さん」（『朝日新聞』2005年6月23日）のように、努力して何ごとかを成し遂げた市井の人が紹介されたものを取り上げたい。「職人」ならではの苦労話こそ、価値ある教材となる。

3 インタビュー実施上の留意点

取材内容を深まりのあるものにすることが、「想」の質を左右する。質問を順に出して答えてもらうという機械的なやり方では、事柄の確かめに終始して、その人の内実に迫ることはできない。一問一答に終始するのではなく、相手の話の中から次の質問を見つけ出し、おもしろそうなところに一步踏み込んで聞き出してることが求められるのである。

そのコツのひとつは、「わからないことを具体的に聞く」*8ということである。抽象的な人生論を漫然と聞くのではなく、ディテールを聞くことによって、そこから核になるものを直観的に抜き出すことが可能になる。（高校生の場合は、次のような手引きを用意する。）

※聞き手としての注意点

- ① 「今、どんなことに夢中になっていますか」をはじめの質問とする。
- ② 具体的な質問を工夫する。（例）「なぜ夢中になっているのですか。」「魅力はどこにありますか。」
「夢中になったきっかけは何ですか。」
- ③ 相手の答えの中から次の質問を考える。（例）「〇〇とはどういうことですか。」「なぜ、〇〇なんですか。」「どんな時に〇〇と思うのですか。」

また、取材では、聞き手が「自分という人間をわかってもらうように話す」ことも求められる。聞き手の人間性が伝わらなければ、相手も話してくれないからである。「聞く」ためには、

自分が話さなければならず、何が知りたいかを明確にしなければならない。

さらに、「聞き書き取材」の核心は「書く時のことを考えながら質問する」*9ことにある、ともいえる。聞き書きの内容が、文字化したときに読み手に理解可能なものになるかどうかを意識しながら取材すると、その場の状況が把握しやすくなり、曖昧な内容で済ませることが少なくなる。

なお、いきなりペア・インタビューを実施することが困難な状況にあるならば、教室にゲストを招き、生徒の代表に実際にインタビューさせて、実践的なコツをつかませるとよい。あるいは、授業担当者自らがゲスト役となって、短いスピーチを行い、そこから質問事項を見つけさせるのもよい。このように段階的な指導を行えば、知らない人にインタビューをするということへの抵抗感も軽減される。

4 作品例

この指導案に従って実践したとき、「生徒たちは、本当に楽しそうに意欲的に取り組んだ」*10という。右の例は、地元のパン工房店長を招いてゲスト・インタビューを行い、文章化したものである。「昔はお菓子作りが苦手だった」という意外な一面を聞き出し、ゲストの方の明るい人柄と仕事への意気込みがよく伝わる文章に仕上げている。

5 聞き書き指導と文体

この学習は、さらに本格的な「聞き書き」指導に発展させたい。夏休み等を利用して、「町の職人」に「仕事」の話を聞きに行き、原稿用紙10枚程度の「聞き書き」にまとめるのである。その際のまとめ方には、多様な方法が想定できる。

第一は、「ルポルタージュ」風の書き方である。聞き手（書き手）自身を主語として、聞いた内容・知り得た事実を紹介していくという形をとる。「私」が主語となり、文末は「～そうだ」という伝聞の形をとることが多い。書きやすい方法であるが、工夫しないと平板な内容になる。また、聞き手の主観が前面に出過ぎるという恐れもある。

第二は、「対談形式」にまとめていく方法である。これが最も簡単であり、どのように聞き出したかをリアルに再現できる方法である。だが、話しことばと書きことばの違いを自覚せずに安易に用いると、焦点のぼけたものになりやすい。

第三は、「人物紹介記事」としてまとめるという方法である。これが、本節の事例として取り上げた方法である。インタビュー内容を焦点化し、要約する能力を育てる学習となるが、概念的・類型的なとらえ方に終始する恐れがある。

第四は、「小説」風にまとめるという方法である。語り手を小説の主人公のように仕立て、三人称を主語にした文体で記していくものである。この方法をとると、主人公の立場になって文末を結ばなければならなくなるので、おのずから他者の心情に同化する経験を重ねることになる。戦争体験の聞き書きなどに適した方法である。

第五は、「一人語り」の方法である。質問者はすべて姿を隠してしまい、ゲストが一人で語っているかのように再構成していく方法である。相手の言葉をいったん自分の中に取り込み、他者になりきって書いていく作業を通じて、生徒たちは人生経験の重さを「わがこと」として理解することができるようになる。また、読み手にも迫真力をもってその真実を伝えることができるようになる。

このように、「聞き書き」は、様々な文体を活用することによって、「想」の形成と拡充を促す学習となる。

「聞き書き」は、日ごろ書くべき内容を持ち合わせていない学習者にとっては、話されたことをそのまま書き残していけばすむ学習であるから、楽しくやさしい学習であると言える。書き手の力量が十分でなくても、語り手の力量が助けてくれるのである。それでいて、作業を進めていくと、そのレベルではとどまっていられなくなる。大村はまの言葉を借りれば、「ちょっと見は軽く、その内実は重いものを蔵しているような」奥行きのある深い学習として生きてくるのである。